

バイデン大統領の就任演説におけるメタファー分析

友繁 有輝*

A Metaphor Analysis of the Inaugural Address by President Biden

Yuuki TOMOSHIGE

要旨：本論は、2021年1月20日に就任したジョー・バイデン大統領の就任演説の中で利用されているメタファーを批判的メタファー分析（CMA）（Charteris-Black, 2014）の観点から考察する。ATLAS.tiを用いた質的分析により、演説のテーマである民主主義や統一の概念がどのようなメタファーを介して前景化しているか、そしてそれによっていかに聴衆の説得に寄与しているのかを検討する。結論として、物語、旅、火、冬、闇、戦いの起点領域が演説内で部分的に共鳴しながらネットワークを形成し、大統領の感情や態度が明確になることを主張する。

Abstract :

This study sought to identify what metaphors are employed in President Biden's inaugural address to reveal the way in which the president persuades the average Americans to support his political view. Drawing on critical metaphor analysis (CMA) (Charteris-Black, 2014), this study investigates the effects of metaphors in a speech by comparing the correspondence between the target and source domains. Whereas conventional metaphors (e.g., JOURNEY, FIGHT) in the previous inaugural addresses have been heretofore scrutinized (Charteris-Black, 2014), Biden's speech has not. Therefore, there is room for detailed analysis to dissect the efficacy of the current president's metaphor and supplement the lack thereof. The research question of this paper is to examine how metaphors are used to foreground concepts such as democracy and unity, fundamental yet difficult-to-achieve vision. In addition to the CMA approach, software ATLAS.ti was used for the qualitative analysis. Consequently, the research concludes that the central source domains in the speech—STORY, JOURNEY, FIRE, WINTER, DARKNESS, and FIGHT—play a prominent role in persuasion, creating a systematic metaphorical network in the speech.

キーワード：メタファー、レトリック、就任演説

1. はじめに

近年のメタファー研究は、1980年頃の認知言語学の台頭により、伝統的なレトリックとしての言語の装飾説から思考の問題へと推移してきた。その趨勢の中、Lakoff and Johnson (1980) の概

念メタファー理論（CMT）は、多岐に渡る研究分野に応用されてきた。特に批判的談話分析（van Dijk, 1993, 1997; Hart, 2008; Musolff, 2016）の考え方を援用した批判的メタファー分析（CMA）（Charteris-Black, 2004, 2005, 2014）は、政治の談話を分析する上で重要な役割を果たし、

*関西学院大学国際学部専任講師

各国の大統領や首相の演説をはじめとする談話において、いかにしてイデオロギーが顕在化するのを取り扱っている。

本稿は、ジョー・バイデン大統領の就任演説をCMAの観点から分析し、「バイデン大統領は、演説のキーワードである統一（unity）をどのようなメタファーを用いて効果的に伝達しているのか」というリサーチ・クエスション（RQ）を主軸として議論を進めていく。米国就任演説は、過去から未来へ続く時系列の中で歴史的・社会的な価値を持つという点において、分析する意義が大きいにある。Campbell and Jamieson（1990: 15）は、就任演説の特徴を次のようにまとめている。1）就任式を目撃し、批准する国民の一員として人々を再構成することで国民を統一する。2）過去からの共同的な価値を繰り返し述べる。3）大統領が行政機能の要件と限界を理解していることを制定によって明示する。4）行動ではなく熟考を促しながら、過去と未来を織り込み現在に焦点を当て、大統領の制度とその一部である政府の価値観と形態を称賛し、大統領と国民の間の契約が成立するプロセスである。すなわち、就任演説は、米国大統領の演説の中でも特に重要な位置を占める代表的な演説である。ちなみにバイデンの就任演説は、外国人移民の子として米国で生まれた2世であるVinay Reddyによって作成された。本稿ではethos（人柄）を考慮に入れ、スピーチライターの言葉は大統領の言葉と同一視することを断っておかなくてはならない。

バイデンは語り始めに、“This is America’s day. This is democracy’s day. A day of history and hope, of renewal and resolve.”のように、民主主義を強調する。それに付随するように、「統一」（“unity¹⁾”（9例）、「真実」（“truth²⁾”（5例））が演説の中で散見される。1889年から2021年の就任演説では、“unity”の使用は、わずか37件しか用いられていない。注意を引くのは、頻度が高い語に対して、バイデンの使用が全体の約

24%を占めていることである。この統一への意識は、トランプ政権時の混乱や分断を煽るレトリック（友繁, 2021）の反動でもあると読める。民主主義と統一というテーマを、国民に伝達するためには、キーワードの反復のみならず、レトリックの技法が必要であることに異論はないだろう。

演説の中で使用されているメタファーは、レトリック（弁論術）の一部であるが、アリストテレスは『弁論術』の中で、「弁論術とは、どんな問題でもそのそれぞれについて可能な説得の方法を見つけ出す能力である」と定義づけ、その目的を「人が勧めたり思い止まらせたりするのはすべて、幸福や幸福に寄与するもの、および幸福に反するもの、に関わるからである」と述べている。先述した4つの観点に加え、大統領の就任演説も最終的には国民を説得することで、国の構成員の幸福に寄与することを目的とする必要がある。あるいは少なくとも、大統領は国民にそう思わせなくてはならない。その見せ方、つまり説得の方法としてメタファーは有益なのである（Boeynaems et al., 2017）。

伝統的にメタファーは、“たとえるもの”と“たとえられるもの”、そして“たとえの根拠となるもの”をそれぞれ趣意（tenor）、媒体（vehicle）、根拠（ground）の3つの要素から成り立つものだと思われてきた（Richards, 1936: 118-120）。だが、A is Bの形式でメタファーが表出する場合、趣意と媒体は明示されるが、根拠は必ずしもそうではない（山梨, 1988: 15）。さて、このA is Bのメタファーを考察する際、Lakoff and Johnson（1980）は、CMTを2つのドメインの写像現象として認識しており、喩えられるドメインを目標領域（target domain）、喩える方を起点領域（source domain）として説明している。例えば、「恋愛は旅である」というメタファーは、恋愛が目標領域であり、旅が起点領域である。本稿においても、この用語を用いてメタファーを観察する。第二節にて、分析手法とデータを提示

1) Corpus of Political Speeches (COPS) (1798年～2015年のデータを収録) では、1889年～2009年の間に使われた“unity”の数は計28件である。なお、2017年のトランプの演説では用いられていない。

2) COPSでのデータでは、1789年～2015年の間に使われた“truth”の数は28件のみである。(2017年の演説では使用されていない。)

し、第三節で、データに基づくメタファーの具体的な言語表現及び前景化する事柄を観察する。最後にまとめと今後の展望を述べて議論を締め括る。

2. 分析手法とデータ

2.1 分析手法

Charteris-Black (2014: 174-182) の CMA は、演説の中のメタファーを同定し、解釈する上では適切な手法である。この手法は、1) コンテキストの分析 (contextual analysis) 2) メタファーの同定 (metaphor identification) 3) メタファーの解釈 (metaphor interpretation) 4) メタファーの説明 (metaphor explanation)、という4つの段階を踏む。

1つ目のコンテキストの分析では、ターゲットとなる談話のメタファー分析をすることで何らかの解を得られるよう RQ を設定することである。本稿では、前述した「バイデン大統領は、演説のキーワードである統一 (unity) をどのようなメタファーを用いて効果的に伝達しているのか」という RQ に基づいて議論を進めることにする。

2つ目のメタファーの同定に関しては、代表的な研究に Pragglejaz group (2007) や Reijnierse et al. (2017) などがあるが、本稿では Charteris-Black (2014) の分析手法を採用する。例えば、Pragglejaz group (2007) の分析では、“Sonia Gandhi has struggled to convince Indians that she is fit to wear the mantle of the political dynasty into

which she married” の “wear the mantle” は、“wear” と “the mantle” を別々のメタファーとして分析している。他方、Charteris-Black (2014: 177) は、イデオロギー的に興味深いメタファーは、繰り返される使用を通して慣習的なコロケーションとして定着しているため、フレーズとして分析するべきだと主張している。

メタファーの解釈については、どのようにメタファーが分類され、まとめられ、配置されているのかを決定することである。同じ意味場に属する語、例えばスポーツや光などに焦点をあてて分類する方法や逆にそれらが何を示唆しているのかに基づいて振り分ける方法などがある。加えて、ある語の字義的な意味に基づいて分類する起点領域を中心とした分類や、コンテキストの中でそれらの語が何を指し示しているのかを見極める目標領域を土台とした分類方法がある。本稿では、演説の中で使用されている語が何を示唆し、それによってどのような効果があるのかを問題としているため、目標領域を軸とした分析手法を採用している。

最後のメタファーの説明に関しては、より幅広い政治的・社会的なコンテキストに立ち戻りメタファーの目的を吟味することである。つまり、メタファーがどのようにオーディエンスに影響を与え、他の演説の特徴といかに関連するのか、また国民の団結力を高めたり、あるいは意見を変えるための説得の役割について考察する段階である。

○ **FIGHT**

Created: 2021/08/30 **Modified:** 2021/08/30

Used In Documents:

- ☑ 1 Joe Biden inaugural address.docx

Quotations:

- ② 1:22 ¶ 36, And now, a rise in political extremism, white supremacy, domestic terrorism that we must confront an... in Joe Biden inaugural address.docx
- ② 1:27 ¶ 49–52, Uniting to fight the common foes we face: Anger, resentment, hatred. Extremism, lawlessness, violenc... in Joe Biden inaugural address.docx
- ② 1:31 ¶ 65, The battle in Joe Biden inaugural address.docx
- ② 1:32 ¶ 66, Victory in Joe Biden inaugural address.docx
- ② 1:34 ¶ 67, prevailed in Joe Biden inaugural address.docx
- ② 1:41 ¶ 94, prevailed, in Joe Biden inaugural address.docx
- ② 1:52 ¶ 158, We face an attack on democracy and on truth. in Joe Biden inaugural address.docx
- ② 1:259 ¶ 142, face this pandemic as one nation. in Joe Biden inaugural address.docx
- ② 1:264 ¶ 159–163, A raging virus. Growing inequity. The sting of systemic racism. A climate in crisis. America's role... in Joe Biden inaugural address.docx

Linked Codes:

- is associated with → ○ JOURNEY
- ← is associated with ← ○ STORY

図1 ATLAS.ti による code の作成

この段階を踏めば、最終的に演説の下地となっているイデオロギーや政治的神話を同定することに貢献する。本稿はこれらの4つの手順を踏まえた上で、ソフトウェア ATLAS.ti を使用してテキストの分析をした。ATLAS.ti では、図1のように、バイデンの演説の中で用いられているメタファーやレトリック技法に code (e.g., FIGHT) を付与し、文脈情報と照らし合わせてメタファーを分析した(本稿で取り扱うデータは、主要なメタファーのみである)。

2.2 データと複合体としてのメタファー

本稿では、RQ に基づき目標領域を中心としたメタファーの収集方法を使い、データを採取した。演説で用いられている主要なメタファーは、結果は以下の通りである。

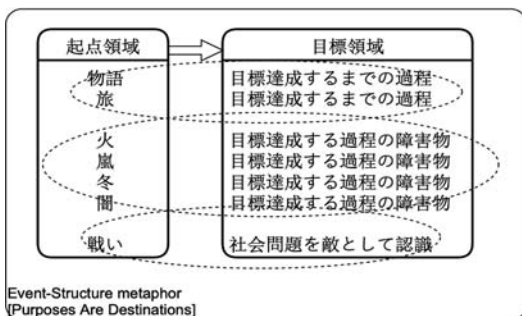


図2 起点領域と目標領域の対応関係

バイデン大統領の就任演説では起点領域として、旅、火、物語、戦争、嵐、冬、闇、が挙げられる。図1の目標領域については、第三節からのメタファーの考察の中で詳述するがこの演説の中で中心的な役割を果たしているメタファーは、アメリカ物語と旅のメタファーである。留意すべき点は、それぞれのメタファーは独立して存在しているわけではなく、ネットワークのように共鳴していることである(図5を参照)。

その下地となるのが、スキーマとしてのスタート地点とゴール地点であり、Lakoff and Johnson (1999) が提示する Location and Object Event-Structure metaphors である。このメタファーは、Grady (1997) のプライマリーメタファー(“Causes are Forces” や “Changes Are Move-

ments”) に基礎を置く。この種のメタファーは、経験の共起性、つまり原初的に人間が経験する基本的な運動感覚によって産出され、例えば、AFFECTION IS WARMTH (愛情は温かさである)、MORE IS UP (量が多いことは上である)、INTIMACY IS CLOSENESS (親密さは近さである)、UNDERSTANDING IS GRASPING (理解することは掴むことである)(谷口, 2003) などが挙げられる。このような原初的な運動感覚は、人間が外界で遭遇する因果関係、行動、状態、困難性、行動の自由、目的、変化などを抽象レベルで構成し、それによって具現化されたものが言語として表出される。Lakoff and Johnson (1999: 190-194) は、目的と手段を構築する思考は、Purposes Are Destinations (目的は目的地である) とし、図3のように更なる下位構造を例示している。

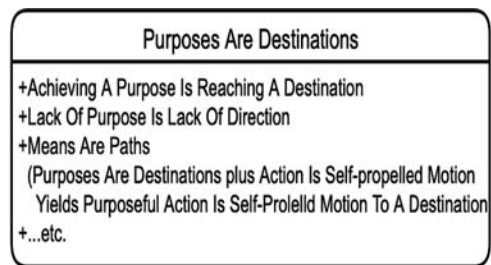


図3 Purposes Are Destinations とその下位構造

一般的に、目的を表す英語表現は、より根源的な思考様式へと還元できる。例えば、Ruiz de Mendoza Ibanez and Perez Hernandez (2011) は、何かを旅に喩えるメタファーについて、レイコフらの議論をまとめ、LIFE IS A JOURNEY (e.g., “LOVE”/A CAREER/A BUSINESS) (人生(愛、キャリア、ビジネス)は旅である)などのメタファーは、全て Purposes Are Destinations によって産出されていることを示している。すなわち、バイデンの就任演説の中で用いられている旅のメタファーもこの抽象概念によるものであり、それが土台となって他のメタファーが組上に載せられている。この前提を踏まえ、次節からは起点領域を順に観察し、それぞれのメタファーが談話の中で持つ意味を考察する。

3. メタファーの考察

3.1 物語のメタファー

物語のメタファーは、この演説の中で中心的な役割を果たし、主題と呼応するように用いられている。このメタファーを喚起する語（“American story”、“chapter”、“story”）が演説の中で散りばめられ、アメリカ物語についてバイデンの見解が垣間見える構成である。テーマの「統一」と対立する「分裂」の概念は、“not any one of us”や“not on some of us”に表れ、「統一」は“on all of us”によって体现されている。表1（付録を参照）からもわかるように、アメリカ物語は、米国が「統一」と「民主主義」にたどり着くまでの物語として描かれ、先人から続くその物語の次の章を書き進めることをバイデンは呼びかけている。

注目すべきレトリックは、物語メタファーが別の比喩によって説明されるメタメタファーである。ここでは、直喩がその機能を果たし、アメリカ物語は「アメリカ賛歌」と似た響きがあると示されている（“A story that might sound like a song”）。この直喩（“like a song”）の“song”は、当然ながら歌のメロディやコードではなく、その内容を表しているという点でメトニミーだと判断できる。演説では、(1) がバイデンにとって特別な一節であることが明示されている。

- (1) The work and prayers of centuries have brought us to this day. What shall be our legacy? What will our children say? Let me know in my heart, when my days are through, America, America, I gave my best to you.

(1) の内容が示唆するように、アメリカ物語とは、メトニミーを介して観察すると、「米国民が国に最善を尽くす物語」と言い換えることができる。この解釈は、演説の中で直接的に表されているわけではないが、直喩とメトニミー解釈から導き出される。なお、この直喩からのメトニミー的視点は、過去から現在、さらに未来へと広がる。大統領は、(1) の引用の後で、“If we do this, then when our days are through, our children and our

children’s children will say of us : ‘They gave their best. They did their duty. They healed a broken land.’”（そうすれば、自分の人生が終わるとき、子供たちや、子供たちの子供たちが、我々のことをこのように述べてくれます。「彼らは最善を捧げました。自らの義務を果たしました。壊れた国を癒やしました」と。）と続けている。

バイデンの想定する物語の内容は、米国に最善を尽くすことを前提とし、さらに演説の中で展開していく。例えば、「恐怖ではなく希望の、分断ではなく団結の、暗闇ではなく光の物語」であると同時に「良識と尊厳の、愛と癒しの、偉大さと善性の物語」でなければならないと述べる。物語メタファーの締めくくりには、民主主義、希望、真実、正義の4つの柱が擬人化（“Democracy and hope, truth and justice, did not die”）され、これによって米国を支える「統一」に必要な4つの根本的な理念が再び強調されているのである（表1の物語のメタファーを参照）。

3.2 旅と火のメタファー

大統領の就任演説において、旅と戦争は慣例的なメタファーである（Charteris-Black, 2014；友繁, 2017）。旅のメタファーでは経路のイメージスキーマ（Johnson, 1987）が基盤となり、その経路に沿って歩むことが、米国の進む方向性へと照らし合わされる。以下の例を参照されたい。（下線部筆者。以下同様。）

- (2) a. As we look ahead in our uniquely American way, restless, bold, optimistic and set our sights on a nation we know we can be and must be, I thank my predecessors of both parties.
b. This is our historic moment of crisis and challenge. And unity is the path forward.
c. Politics doesn’t have to be a raging fire destroying everything in its path.
d. To all those who did not support us, let me say this. Hear us out as we move forward.
e. And the guardrail of our democracy is

perhaps our nation's greatest strength.

- f. My fellow Americans, in the work ahead of us we're going to need each other.

経路の「前」のイメージは、(2 a) の “look ahead” や (2 b) の “path forward”、そして (2 f) の “ahead of us” から看取される。これらの表現から、道の先の「前」とは米国の未来を示していることは明白であろう。道を前進することは、「前を見る」ことが不可欠であるが、道の先を視覚的に捉えている表現が “set our sights on a nation” によって表されている。勿論、“set our sights on” はイデオムとして、「目標にする」という意味だが、日本語の「目標」も英語と同様に目、つまり視覚が漢字の中に含まれ、「標」とは「目印」を示している。英日ともに視野に入るもの、つまり「旅」の道中に本来の道から逸れないようにする手段が「目標」である。

それを踏まえると、(2 a) からは、米国の未来は、比類なき米国のやり方で、立ち止まらず、大胆に、楽観的な国家を目標とする、というバイデンの意図が読み取れる。その理想的な姿を追い求めている一方で、トランプ政権によって分断の加速が進んだ状態をバイデンは “historic moment of crisis and challenge” と形容している。その文脈の流れで “unity is the path forward” から喚起される旅のメタファーによって、「統一」の概念が前景化されている。

なお、一般的な旅はスムーズに目標地点まで到達することよりも、何がしかの障害物に遭遇したり、寄り道をすることも少なくはない。バイデンは (2 c) のように火のメタファー (“a raging fire destroying everything”) によって、統一へと向かう旅には障害物があることを示唆している。それゆえ、旅のメタファーの障害物がさらに火のメタファーによって喩えられているという点で、これもまたメタメタファーとして機能していると考えられる。民主主義や統一へと前進 (“move for-

ward”) する米国の行く手を阻む障害物が火によって写像されている構図と換言できよう。火のメタファーの、“destroy everything” という表現からは、民主主義を含め、その目標に到達するための全ての手段を破壊してしまうという解釈が出てくるだろう。民主主義の縁語³⁾も多く確認されるが、火のメタファーはこれら全てを消し去る可能性を諷示している。

バイデンは破壊の概念から、民主主義の保護のイメージへと聴衆を誘う。例えば、(2 e) の “guardrail of our democracy” のガードレールは、脱線防止を目的としたものであり、経路のスキーマや Purposes Are Destinations と上手く合致している。旅のメタファーでは米国が民主主義と統一を実現する、という目標達成までの過程を示し、その道中の障害物が火のメタファーによって表されている。

3.3 嵐、冬、闇のメタファー

バイデンの就任演説では、物語・旅のメタファーによって目標を達成するまでの過程を示しているという点において2つのメタファーが重なる部分があることを概観した。旅のメタファーの障害物として火のメタファーが用いられていたが、その他にも嵐、冬、闇などの起点領域によって反映されている。例えば、(3) に観察されるように嵐のメタファーも、火のメタファーと同様に旅の道中の障害物として描かれている。

- (3) This is a great nation, we are good people and over the centuries through storm and strife in peace and in war we've come so far. But we still have far to go.

嵐のメタファーによって米国は何世紀にもわたって困難を乗り越えてきたことが顕示され、その旅は今後も続くこと (“But we still have far to go.”) が示唆されている。困難性に関しては、さらに冬

3) (名詞) “hope” “union” “strength” “dream (dream of justice)” “unity” “secure” “better angels” “American ideal” “dignity” “respect” “prevail” “heroes” “peace” “love” “opportunity” “security” “liberty” “honour” “truth” “boldness” “light” “decency” “greatness” “goodness” “justice” (形容詞) “bold” “optimistic” “good” “safe” “better” “brave” “great” (副詞) “together” “peacefully”

のメタファーによって描写されている。

- (4) a. We'll **press forward with speed and urgency** for we have much to do in this **winter** of peril and significant possibility.

- b. We need all our strength to persevere through this **dark winter**. We're entering what may be the darkest and deadliest period of the virus.

(4 a) では、“winter of peril” (危険な冬) というコロケーションが使われている。このコロケーションについては、winter of N⁴⁾ というチャンク自体が悪い概念を喚起すると考えられる。冬がネガティブな概念を示す用法は、(4 b) でも確認されるが、ここでは形容詞の“dark”によって修飾されていることから、光のメタファーが関与している。光は善というメタファーは裏を返せば、闇は悪というメタファーと表裏一体である。このメタファーは後続する“darkest”にも表されており、その暗闇の中に入っていく (“We're entering”) 様子が描かれ、世界がコロナウイルスによって逼迫した状況に陥っていることを暗示している。なお、コロナは旅の道中で遭遇する困難の一つ (“we must set aside politics and finally face this pandemic as one nation”) として認識されている。この文脈の直後に (5) のように詩篇が引用されている点は、光と闇のメタファーを考察する上で肝要である。

- (5) And I promise this, as the Bible says, ‘Weeping may endure for a night, joy cometh in the morning’. We will get through this together. Together.

聖書の引用箇所 (詩篇 30 : 5) (「泣きながら夜を

過ごす人にも喜びの歌と共に朝を迎えさせてくれる」) には、重要なアナロジー的思考が観察される。朝、昼、晩は、1 日を人生の一生として見立てるアナロジーは、夜が過ぎれば新たな 1 日が始まるように、人生において、悪い局面は過ぎ去りいずれ良い局面を迎えることが含意されている。(3) や (4 a) に見られるように、バイデンは夜を通り抜ける (“get through”) やスピードやと緊急性を持って前進する (“press forward with speed and urgency”) という表現を用いており、旅の道中で遭遇する困難を夜から連想される暗闇や冬に喩えている。対して、朝を迎える、換言すると、暗闇から光が照らされる状況に肯定的な意味を付与し、対極的に光を善として認めている。この見識は、物語メタファーの “Of unity not division, of light, not darkness” の中にも示されており、光や闇のメタファーが物語や旅のメタファーに部分的に重なり合って、善悪という対立軸が効果的に伝達されている。光が善であるという認識は、“That our America secured liberty at home and stood once again as a beacon to the world.” の中にも読み取れる。一般的に、演説の中で “beacon⁵⁾” が使用される時には、ポジティブな語彙がコロケーションとして用いられる傾向がある。以上のように、火、嵐、冬、闇のメタメタファーが、旅のメタファーの困難性を概念化していることを確かめた。次節では、バイデンが認識する敵の判別から、「民主主義」や「統一」と対立する概念を観察する。

3.4 戦いのメタファー

大統領の演説において、戦争 (戦い) はよく使用される起点領域であり、戦う相手を同定することで、大統領が認識する課題や社会問題を見出すことができる。その効果とは、本来強調したい事柄と反対の事柄を明確にすることによって、前者

4) COCA で winter of N (winter of [n*]) を検索すると、上位 10 語は順に、“winter of discontent” (20 件)、“winter of despair” (5 件)、“winter of war” (4 件)、“winter of life” (4 件)、“winter of rage” (3 件)、“winter of record” (3 件)、“winter of kindergarten” (3 件)、“winter of fear” (3 件) “winter of Bosnia” (2 件)、“winter of darkness” (2 件) となり、比較的否定的な名詞がスロットに代入される傾向がある。

5) Corpus of political speeches (COPS) において、“beacon of” の後にどのような語が共起するのかを調べたところ、“hope” (15 件)、“liberty” (5 件)、“freedom” (2 件)、“peace” (2 件)、“human” (1 件)、“opportunity” (1 件)、“warning” (1 件) の計 27 件が検出された。

の概念の輪郭をはっきりさせることにある。戦いのメタファーでは、「民主主義」や「統一」と対立する概念が散りばめられており、それらの理解がキーワードの理解を促進すると言えよう。就任演説では、“fight”、“the battle”、“victory”、“prevailed”、“prevail”、“protect”、“defend”、“defeat”、“attack”、“confront”が戦争や戦いを想起させている。ただし、直接的に戦争を喚起する語は、“the battle”（不可算名詞で戦争行為を表す）しかないため、戦争メタファーではなく、戦いのメタファーとして各表現を観察する。このメタファーから、浮き彫りとなる敵としての対象物をまとめると下記ようになる（各表現の文脈に関しては、付録を参照）。

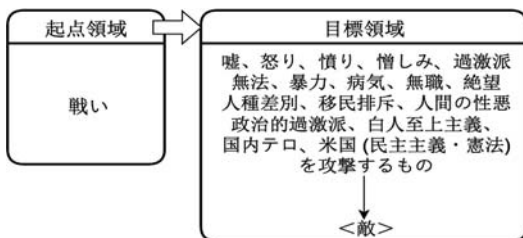


図4 戦いのメタファーの起点領域と目標領域の対応関係

戦いの対象物は、1) 感情・抽象概念 2) 社会問題 3) 国（民主主義や憲法）や人に大別することができる。演説の中では、負の感情について、怒り、憤り、憎しみ（“anger, resentment and hatred”, “hopelessness”）が敵として捉えられている。内容や定義が不透明な抽象概念は、人間の善や真実（“better angel”, “truth”）であり、これらを善とみなす一方で、それとは反対の概念、人間の性悪や虚偽を敵としてみなしている。

2つ目の社会問題は、過激派、無法、暴力、病気、無職、人種差別、移民排斥主義、政治的過激派、白人至上主義、国内テロ（“extremism, lawlessness, violence, disease, joblessness”, “racism”, “nativism”, “political extremism”, “white supremacy”, “domestic terrorism”）であり、これらを戦いの敵として想定しているということは、過激な思想による国の分断や暴力が解決に時間を要する困難な社会問題であることが含意されている。最

後の項目については、米国や民主主義、憲法を攻撃する人や国は敵であるという認識が隠れているが、敵の具体的な人名や国名が明示されていないことの理由として、不必要な混乱や誤解を回避する目的があると考えられる。

特に“peaceful transfer”を基礎にする政権交代において、就任演説で前政権の批判をすることは好まれない。バイデンの就任演説においても、直接的に前トランプ政権を批判せずに、戦いのメタファーを利用することで、間接的にその機能を果たしている。例えば、“To defend the truth and defeat the lies.”では、真実を守り、嘘を敵と見立てているが、この背後にあるのは、「ポスト・トゥルース」や「フェイクニュース」あるいは「オルタナティブ・ファクト」なる言葉が人口に膾炙した事実である。何より問題なのは、トランプ政権では科学的な事象に対しても、「フェイクニュース」によってトランプ支持者の中で誤った情報が氾濫し、それにもかかわらず事実よりもその嘘の情報を信じる人が増えたことである。この趨勢を鑑みると、バイデンが嘘を敵の対象として認識していることは不思議ではない。嘘自体は、これまでも政治的に多く使用されてきたはずであるが、過去の嘘と何が根本的に異なっているのか。この観点から、百木（2019）は伝統的な嘘と現代的な嘘の区別を、織物の比喻を使って以下のように説明している。

伝統的な嘘が「事実性という織地に穴を開ける」のようなものであるのに対して、現代的な嘘は「事実の織物全体の完全な編み直し」のようなものである。つまり、「現代的な嘘」は真実というカテゴリーそのものを破壊し、それを通じて我々の「世界」を破壊しようとする。それゆえ、「現代的な嘘」が我々の社会に蔓延するとき、そこでは真実と嘘の区別という基準自体が損なわれる（百木、2019：102）。[強調原文]

この指摘が非常に重要であるのは、まさしくこの社会情勢がバイデンの演説の“defeat the lies”に集約されているからである。戦いのメタファーに

よって、この「現代的な嘘」という問題は根深く社会に居座っていることを、誰が原因なのかということをも単刀直入に明かすことなく、暗黙のうちに明示できる、という技法にこそメタファーの効果があると結論づけられる。

4. 演説の主題と メタファーのネットワーク

バイデンの就任演説では、物語、旅、火、嵐、冬、闇、戦いのメタファーは乖離して存在しているわけではなく、それぞれが部分的に統合しながら、「民主主義」や「統一」のテーマを軸に点在していることを観察した。すなわち、バイデンは、スキーマとしてのスタート地点からゴール地点をベースとして過去から未来への時系列を示すと同時に、ゴールへの過程の様々なメタファーを連続体として運用しているのである。図5はこの一連の流れを図示したものである。

図5で概観されるように、アメリカ物語と旅のメタファーが演説を構成する中心的なメタファーである。アメリカ物語は過去から未来へと続く歴史であり、演説内では米国民が国に最善を尽くす物語であると記されていた。図5の右側に、その

具体的な表現を一部記載している。その左側に Purposes Are Destinations を基礎とする旅のメタファーとその他のメタファーのネットワークを描載している。

その他のメタファーも完全に旅や物語メタファーから切り離されているわけではなく、関連性 (is associated with) を持ちながら、ネットワーク状に広がりを持っているわけである。加えて、嵐、冬、闇のメタファーは障害物として描かれているため、旅のメタファーの一部 (is part of) の関係になっている。このように、字義的に意志を表明するだけでは覆い隠されてしまう大統領の考えや態度が、様々なメタファーによって浮かび上がるのである。

5. 結 語

本稿は、「バイデン大統領は、演説のキーワードである統一 (unity) をどのようなメタファーを用いて効果的に伝達しているのか」という RQ を設定し、それに沿って CMA のアプローチから就任演説を観察した。演説では慣習的なメタファーやバイデン独自のメタファーが錯綜しながら、目的を目的地と見立てる概念化を基礎として

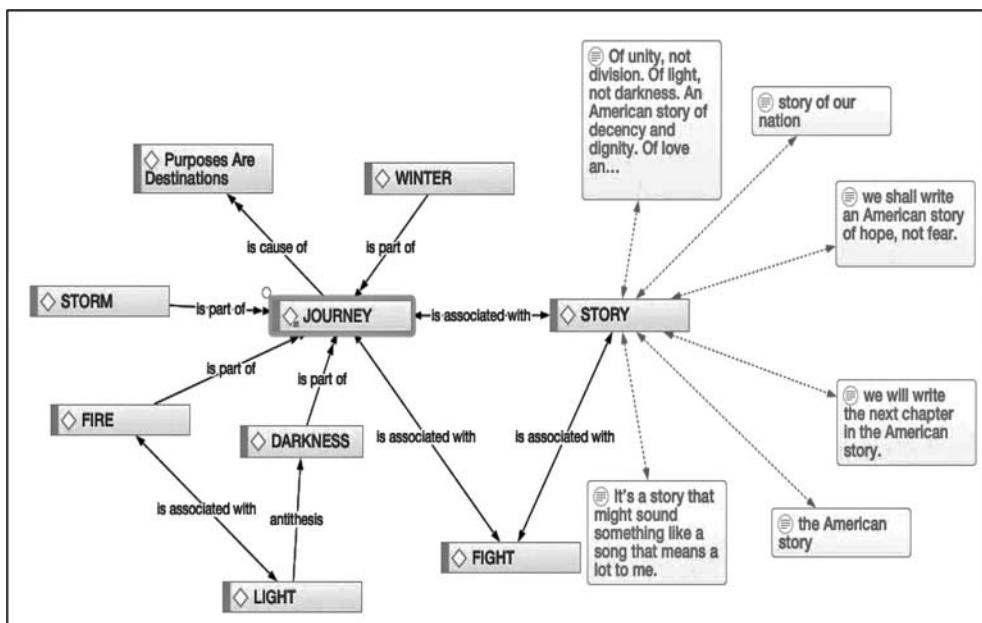


図5 メタファーのネットワーク (ATLAS.ti による作成)

ネットワーク状に拡大していることを概観した。特筆すべき点は、ポスト・トゥルースの動向で、米国で風前の灯火となってしまった「民主主義」と「統一」が演説の柱になっていることであろう。この危機感は、ある対象を「敵」と見立てる戦いのメタファーの中で体现されており、聴衆や読者によりリアルなイメージ掻き立てることに成功している。今後は、メタメタファーが他の就任演説においても効果的に使用されているのかを分析し、精緻化することで米国大統領のメタファー使用から得られる洞察を深めていくことが喫緊の課題である。

付録

表 1 物語と旅のメタファー

物語メタファー

But the **American story** depends not on any one of us, not on some of us, but on all of us. / I believe we must and I'm sure you do as well. I believe we will, and when we do, we'll **write the next great chapter** in the history of the United States of America. / **The American story. A story that might sound like a song** that means a lot to me, it's called American Anthem. And there's one verse that stands out at least for me and it goes like this .../ Let us add our own work and prayers to **the unfolding story** of our great nation. If we do this, then when our days are through, our children and our children's children will say of us : 'They gave their best, they did their duty, they healed a broken land.' / And together we will **write an American story** of hope, not fear. Of unity not division, of light, not darkness. **A story** of decency and dignity, love and healing, greatness and goodness. May this be **the story** that guides us. **The story** that inspires us. And **the story** that tells ages yet to come that we answered the call of history, we met the moment. Democracy and hope, truth and justice, did not die on our watch but thrive.

表 2 戦いのメタファー

戦いのメタファー

Uniting to **fight the foes** we face—anger, resentment and hatred. Extremism, lawlessness, violence, disease, joblessness, and hopelessness. / **The battle** is perennial and **victory** is never secure. / Through civil war, the Great Depression, World War, 9/11, through struggle, sacrifice, and setback, our better angels have always **prevailed**. / As mentioned earlier, completed in the shadow of the Civil War. When the union. itself was literally hanging in the balance. We endure, we **prevail**. / And I promise you I will **fight for** those who did not support me as for those. / Leaders who are pledged to honour our Constitution to **protect** our nation / To **defend** the truth and **defeat** the lies. / We face an **attack** on our democracy, and on truth, a raging virus, a stinging. inequity, systemic racism, a climate in crisis, America's role in the world / I will **defend** the Constitution, I'll **defend** our democracy / I'll **defend** America and I will give all—all of you—keep everything I do in your. Service / The rise of political extremism, white supremacy, domestic terrorism, that we must **confront** and we will **defeat**.

参考文献

- Boeynaems, A., Burgers, C., Konijn, E. A., & Steen, G. J. (2017). The effects of metaphorical framing on political persuasion : A systematic literature review. *Metaphor and Symbol*, 32(2), 118-134.
<https://doi.org/10.1080/10926488.2017.1297623>.
- Cameron, L., Maslen, R., Todd, Z., Maule, J., Stratton, P., & Stanley, N. (2009). The discourse dynamics approach to metaphor and metaphor-led discourse analysis. *Metaphor and Symbol*, 24(2), 63-8.
<https://doi.org/10.1080/10926480902830821>
- Campbell, K. K., & Jamieson, K. H. (1990). *Deeds done in words : Presidential rhetoric and the genres of governance*. University of Chicago Press.
- Charteris-Black, J. (2004). *Corpus approaches to critical metaphor analysis*. Springer.
- Charteris-Black, J. (2005). *Politicians and rhetoric : The persuasive power of metaphor*. Springer.
- Charteris-Black, J. (2014). *Analysing political speeches*. Macmillan International Higher Education.
- Goossens, L. (1990). Metaphonymy : The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action. *Cognitive Linguistics*, 1(3), 323-42.
- Grady, J. E. (1997). *Foundations of meaning : Primary metaphors and primary scenes*. Doctoral thesis, Uni-

- versity of California, Berkeley.
- Group, P. (2007). MIP : A method for identifying metaphorically used words in discourse. *Metaphor and Symbol*, 22(1), 1-39.
https://doi.org/10.1207/s15327868ms2201_1
- Hart, C. (2008). Critical discourse analysis and metaphor : Toward a theoretical framework. *Critical Discourse Studies*, 5(2), 91-106.
<https://doi.org/10.1080/17405900801990058>.
- Johnson, M. (1987). *The body in the mind : The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. University of Chicago Press.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1999). *Philosophy in the flesh : The embodied mind and its challenge to western thought*. A Member of the Perseus Books Group.
- Musolff, A. (2016). *Political metaphor analysis : Discourse and scenarios*. Bloomsbury Publishing.
- Reijnierse, W. G., Burgers, C., Krennmayr, T., & Steen, G. J. (2017). DMIP : A method for identifying potentially deliberate metaphor in language use. *Corpus Pragmatics*, 2(2), 129-147.
<https://doi.org/10.1007/s41701-017-0026-7>
- Ruiz de Mendoza Ibáñez, F. J., & Pérez Hernández, L. (2011). The contemporary theory of metaphor : Myths, developments and challenges. *Metaphor and Symbol*, 26(3), 161-185.
<https://doi.org/10.1080/10926488.2011.583189>
- Richards, I. A. (1936). *Philosophy of rhetoric*. Oxford University Press.
- Van Dijk, T. A. (1993). Principles of critical discourse analysis. *Discourse and Society*, 4(2), 249-283.
<https://doi.org/10.1177/0957926593004002006>.
- Van Dijk, T. A. (1997). What is political discourse analysis? *Belgian Journal of Linguistics*, 11(1), 11-52.
<https://doi.org/10.1075/bjl.11.03dij>.
- アリストテレス (1992). 『弁論術』 戸塚七郎訳. 岩波文庫.
- 百木漠 (2019). 「ポスト・トゥルース」『現代思想』 47(6) : 100-105.
- 谷口一美 (2003). 『認知意味理論の新展開：メタファーとメトニミー』 研究社.
- 友繁有輝 (2017). 「アメリカ大統領の就任演説 (1960年-2017年) におけるメタファー分析」『日本認知言語学会第18回大会論文集』 第18号 : 97-109.
- 友繁有輝 (2021). 「レーガンとトランプの就任演説における反復のレトリック分析：反復とイデオロギーの創出について」『文体論研究』 第67号 : 53-68.
- 山梨正明 (1988). 『比喩と理解』 東京大学出版会. (コーパス)
- Corpus of Contemporary American English retrieved from <https://www.english-corpora.org/coca/>
- Corpus of Political Speeches retrieved from <https://digital.lib.hkbu.edu.hk/corpus/>